

## <一般分>

# 北海道大学

## 実施報告

### (1) 実施責任者報告

北海道大学 言語文化部教授 本田 錦一郎

(放送教育委員会委員長)

#### 1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

北海道大学放送講座は本年で5回目を完了した。今回もこれまでの方式に従って、北海道大学放送教育委員会が、「大学教育の社会的開放」あるいは、社会的要請としての「生涯教育」の一環という基本使命のもとに、慎重に討論した上で放送テーマが決められ実施された。

北海道大学放送教育委員会は北大の全部局を9つのブロックに分け、各ブロックからの委員、それに学長が必要と認めた委員、計11名で構成されている。これに北海道放送(HBC)からラジオ・テレビ番組制作責任者、北海道教育庁社会教育課及び本学事務局関係者が加わり計9回の委員会を開催した。その他ラジオ・テレビそれぞれの専門委員会を数回開催した。

討議の内容は3つの柱からなる。1つは総合大学としての大学からの提案、これは毎回行ってきた受講生へのアンケート調査内容や教養部で実施された総合講義のテーマ等の実績を十分に考慮した上での提案である。

これに対しHBC側からはラジオ及びテレビのメディア特性の立場から具体的な助言があり、さらに北海道教育庁側からは社会教育的観点から希望が述べられ、厳しい討議の上に、全体的企画が生かされてきた。

また、本学放送講座を実施するにあたっては、北海道総務部・北海道教育委員会・札幌市教育委員会・旭川市教育委員会・函館市教育委員会・帯広市教育委員会・留萌市教育委員会および北見市教育委員会の後援をうけ、各地方における広報活動のみならず、学習センターの開設(再視聴)、スクーリングの実施、学習会等に全面的なお力添えをいただいている。

#### 2. テーマの選定とそのねらいについて

北海道大学放送講座も一区切りとしての5回目を迎え、その主題の選定とねらいに関しても、ようやく過去の実績をふまえたひとつの方向性が見出されるに至った。ところで、ラジオ講座としては、そのメディアの機能性を考慮し、多少難解ではあっても、真の「自己認識」という広い視座から、遠くて近いアジア文化圏の理解を深める仕事のひとつとして中国がまずとりあげられ、その奥

行ある解明のために、「中国の古典を読む」と題し、北海道大学をはじめ道内諸大学におけるその道の英知を結集していただいた。

第1回の「易」に、中国的思惟の源流をさぐるところから始め、最終回の「紅樓夢」に、新しいものを生み出すための近代の苦悩を見ようとした展開は、その意図を裏打ちするものである。

テレビ講座は、否応なしに北海道に生住する私どもが、どのような＜人間の生き方としての文化＞のなかにあり、過去と現在を照合させながら、道文化の特性を掘り下げること为目标としたものである。もちろん、これもまた、ラジオ同様、いや、より直接的に、真の「自己認識」への営みであり、明日の私どもの生きざまとかわる緊急な課題であろう。題して、「文化としての北 ― 北海道の地方性を問う ―」という問いかけに、すべての意図が集約されていると考えている。「地方の時代」という無為の言葉に血肉を提供できれば、という願いがそこにはこめられていた。

### 3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

ラジオでは、主任講師のイントロダクションのあと、講師が独演の形式をとった。話題は、時にテキストに即し、時にテキストを離れ、講師の自由な発想によって、詩や小説や論説の朗読や、舞台中継の場面などを取りこみ、平板を避ける労多い試みがなされた。講義の難解さは、毎回最後に行われる主任講師の平明な＜まとめ＞によって補充された。

テレビでもテキストは独立した読み物として読み通せるよう工夫されたが、ラジオと異なり、メディアの特質を十分に生かして、主に映像で語らせるという手法が、今回のきわだった特徴のひとつと数えられよう。しかし問題は、映像の向う側にある（北海道史を生きた）人々の心の在りよう、生活心理の複合様態であって、それを視聴者がどこまで読みこんでいただけたか、これが問題であろう。

### 4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

放送講座受講後の反応は、アンケート集計結果によると、両講座とも90%以上の者が、期待通りあるいは、まあまあ満足と回答していることは、かなり興味をもって視聴していたと推測される。

また、スクーリングについても寒さと雪の中をスクーリングに参加した受講生の熱心さと、講義終了後の質問の質の高さから、与える者（講師）と与えられる者（受講生）の関係をこえて、探究する者と模索する者の関係、ないしは呼応をそこに見ることができた、と言って過言ではない、と考えられる。

### 5. 印刷教材の作成過程について

放送教育委員会で講師が決定されると、各講師にテキスト原稿を依頼するが、原稿はラジオ・テレビのそれぞれの専門委員会で、文体の統一や図表内容等を検討し、加筆あるいは修正が加えられたり、その章によっては、講師に原稿が戻され書き直しをもとめることもある。

従って最初の講師から提出された原稿と再度提出の原稿とかなり違う場合もおこりえた。

筆者校正は初校のみで、2校、3校は専門委員会で行うため、時間的にも余裕がなかったり、責任も重く可能な範囲で文体の統一や内容の加筆の業務も加わり、さらにデリケートな一面が出てくる場合も、現実にはかなりあった。

#### 6. 学習指導の実施状況について

次の三通りの学習指導が行われた。第一は再視聴センターの設置、第2はチューター（学習指導員）による講演及び学習指導（2～4回）、第3は講師自身によるスクーリングである。

いずれの場合も、6会場（札幌、旭川、函館、帯広、留萌、北見）を利用し、講義理解の深化がはかられた〔スクーリングの開催日・受講者数等は別紙〕。

ラジオ講座もテレビ講座も出席者から熱心な質疑が多くだされた。これは、ラジオもテレビも共にテーマか、何等かの形で〈自己確認〉という身近で、かつ、親しみを持ったことが理由と思われるが、あわせて講師陣の熱心さも反映されたと見るべきであろう。

しかし、実施時期が10月～1月となるため、寒波や雪害等により受講生の数が限られるのは、やむをえないところであろう。教育とは、いつの世でも、量より質の問題で、小さな輪から、やがて大きな輪へと拡がる性質と考えられるからである。

#### 7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

放送講座が徐々に道民に定着しつつあると思われる。それは例えばテレビ講座の場合を例にとると日曜日の午後11時40分から午前0時25分という時間帯の不利にもかかわらず、ほぼ2%に達する平均視聴率をあげていることにもうかがえる。

一方、地方自治体が社会教育の一環として積極的に取り組んでいる姿勢もあずかって力があると思われる。

しかし、急速に進む情報化社会の中で道民の要望に答えつづけることは、必ずしも容易ではない。

すなわち、放送講座を通じて、いかにして高いレベルのものを視聴者の血肉になるようにして与えることができるかが問われている。また道民の求めているテーマをいかに選ぶかについても細心の配慮が求められなければならない。

#### 8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

一般市民向けを意識して「面白さ」だけを強調したものを、私どもはあえて避け、どのようなポピュラーな手法が用いられるにせよ、志の高さだけは失いたくないという願望を持ちつづけた。

そのような意図が少しずつ結実して「大学授業用」としての要請が、すでにいくつか申し入れられてきていることは、こちら側の意向が理解されつつあるのではないかと考えられよう。

#### 9. 実施上の問題点と今後の課題等について

北大の放送公開講座は視聴率をみても、またアンケート調査をみても一応の成功を収めたといえ

よう。

しかし、以下に述べるいくつかの問題を内包していることも忘れてはならない。

1. 視聴しやすい放送時間帯の確保、とくにテレビ放映の時間帯。
2. 従来の道民対象の放送講座は将来全国レベルでどのように生かされていくのか。
3. 「北海道大学」放送講座をいかにして「北海道」大学放送講座に発展させることができるか。
4. 主任講師の負担をいかにして軽減すべきか。

## (2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 文化としての北 ―北海道の「地方性」を問う―

主任講師：言語文化部教授 本田 錦一郎

1. 「地方の時代」と言われながら、その意味は、いまひとつ曖昧である。その線上で、「地方性」を論じるにしても、とりわけ北海道のばあい、その広大な地域と、その結果不可避免的に派生する風土性の相違(道南・道央と道東・道北の差)が、一括して、これを論じることを阻んでいるかに見える。

しかし、視点を、あえて「文化としての北」としてとらえ、文化人類学的・歴史学的条件や地域社会学的に文化形成の混在性(あるいは雑居性)などを軸に、問題を掘り下げると、広大な北海道に微妙な共通項と興味ある違和状況が視界に入ってきて、この主題の可能性が示唆されているように考えられるに至った。そこで、論点をここにすえて、世界史的、日本史的な視野から北海道を、いま一度見つめなおそうという発想が生まれた次第である。

どだい、在来までの〈北海道論〉は、いくつかの優れた文献を除いては、おしなべて、重く暗い北海道文学風土論や、ある種の民族理論に終始することが多く、それなりの評価を受けながら、やはり〈局部的〉にすぎなかった、と断定してよかろう。

そこで、地球物理学者、自然地理学者、文化人類学者、近代日本史家、地域社会学者、社会思想史家、そして比較文化(文学)担当の筆者を含め、より学術的な批判に耐えうる「北海道論」を、一定地域にいかに関係がかわってきたか、という意味での〈カルチュア〉の一点にしばって、問題の再点検が行われることになったのである。

2. こうして、まず方法論として3つの軸が設定された。

第1は、横軸としての〈風土論的再検証〉であり、第2は、縦軸としての人間がそれにかかわる〈先史・文化人類学と歴史学的考察〉であり、第3は、本講座の特色のひとつとして、世界および日本文化全体をすべて画一化の方向に押しやる〈現代社会構造〉のなかでの北海道の「地方性」が問われることになる。いわば、現代のテクノロジー全盛の〈社会構造〉そのものが、文化の個性を風化し、無化する傾向は否定すべくもなく、茶の間のテレビは各人の個性さえ、やがて摩滅する方

向に向かうであろうという恐るべき、しかし不可欠の現実を確認するところから、その中で構築される「地方性」とは、一体どのようなものなのか、これこそ、いま問われねばならぬ課題である、と思念するに至った。

3. しかし、難問は山積している。例えば、日々発掘される古い文化遺産は、先史人類学上の学説の変更を、しばしば要請するであろうし、あるいは、史的に見て、北海道の文化要素は、ほぼ6、7点に要約されようが、これらが東北や近江の文化のように、美しい統合を完成するには、あまりにも短い歴史（120年）しかもたないという最大のアポリアを私どもはいかに処理すればよいか、などがそれである。

4. 私どもの仕事は、風土論的には〈漸移帯〉の設定、人類学的には、クロス・ロードとしての北海道の見直し、社会学的には混在文化の未来の夢多い方向性、思想史的には世界史的観点に拠るハイ・テクノロジー文化の光と影の部分、比較文化論的には、日本文化と北海道文化との共通部分の模索などにかかわり、最終的には文化の在るべき姿 — 病ある文化と健康な文化の型 — にも及んだ。

けれども、今にして想えば、北海道論のもつ幾多の難題を提出し、これを確認する段階で本講座の幕を閉じる結果となったことを告白する。けれど、まがりなりにも道民の方々に、この主題に関し、いささかの興味を喚起できたとすれば、それは各講師、放送局、事務局の並々でない協力と蔭の部分でのご支援の賜物と言ってよかろう。今後は、視聴者各位・各方面からのご助言とご支唆を願うばかりである。

（ラジオ科目） 中国の古典を読む

主任講師： 文学部助教授 丸 尾 常 喜

近年の中国古典に対する一般的な関心の高まりは、北海道でも例外ではない。いわゆる国際化の進行が一方でわが国の歴史・文化の理解の必要を促し、ひいてはさまざまな形で日本文化の血肉ともなっている中国文化への関心をひき起こしている点に、その要因の一つをもとめることができよう。

放送教育委員会より中国文化に関する講座の企画の要請を受けて、思想研究の分野から文学部教授松川健二氏、文学研究の分野から私が主任講師として全体の企画・調整に当たることになり、種々検討の結果、十三種の古典作品を各回一種ずつ十三人の講師が担当することにし、題名も「中国の古典を読む」とすることとした。中国の歴史はながく、講座で取りあげうる作品はごく限られたものであるが、各講師の専門、あるいはそれにちかい作品であることを前提に、漢字、思想、歴史、文学の四分野から代表的なものを選び、足りない点は北海道教育大学、北海学園大学からも参加をいただいた。

各講師は短い紙幅、時間の中で長大な作品を紹介し、一方講読の目的をも果たすための引用を行なうという点に苦心した。同時にそれぞれの古典が非歴史的な羅列に終わらぬよう配慮していただいた。このようなやり方は、各回が不消化におちいる危険性もあったが、本講座では中国古典の全体的、歴

史的通観を目的とすることにし、各講師はそのためについて努力された。さらにテキストに主任講師による比較的ながい前書きを置き、それぞれの古典の位置を理解してもらうために、上記の四分野にわたって歴史的概観を行ない、巻末には「中国古典年表」を添えた。また放送にさいしては、放送局側からの助言を受けて、主任講師が交替で各回の冒頭と最後に発言し、各回をつないでいくこととした。

放送にあたっては、専門家による朗読、中国人による詩の朗読や演劇の録音を挿入し、内容を親しみやすくするようこころみた。この点については、放送局のすぐれたスタッフから適切な助言をいただき、不慣れな講師陣はおおいにたすけられた。さらにテキストを読めばわかるではないかというものにならぬようテキストと放送とが積極的に分業して全体の成果を上げることを目指したのは、効果的であったように思う。

スクーリングは各地区とも第1回2名、第2回1名（ただし札幌地区は各回1名の3回実施）を派遣したが、受講生の熱心さに各講師とも感銘を受けた。ただ2人を派遣した第1回については、持ち時間が少なくなって、1名の方がいいのではないかという意見が多かった。

最後に、講師、放送局スタッフのチームワークが終始きわめて良好で、非常に気持ちよく仕事をすすめることができたことに感謝する。

## 制作報告

### (1) 制作責任者報告

北海道放送報道制作局次長 守 分 寿 男

#### 1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

「講座」としての知識の体系を、どのように分かり易く、正確に伝えるか、それが、先ず第一の基本方針となる。次に、それを更に深めて、映像と音声による制作者の翻訳と表現を考える。テレビ・ラジオというメディアの特性をふまえながら、内容を十分に咀嚼して、論理と感性という両面からのアプローチを絶えず心がけるようにしている。

こうした作業のためには、かなり長時間の準備期間が必要となる。

「北海道大学放送講座」の場合は、企画の決定は放送開始のほぼ1年半前に、北大の全学的な協力のなかで選ばれた11名の委員、北海道教育委員会、放送局の検討を通して行なわれる。企画が決まると、ほぼ半年間にわたって、チーフオルガナイザーを中心に、ラジオ・テレビ各13回のテーマの展開、講師の人選（他大学を含めた全道規模による）各回毎の内容の検討が進められてゆく。

形が決まるのが一年前で、各講師はそこからテキストの作成に入り、制作者は各講師と密接な連絡を取りながら構成と取材の準備に入っていく。

このため、制作者は、今年度の制作と放送を行いながら、来年度のテーマを深めてゆくという、長期的な作業が可能になり、過去の経験と実績の上に、現在、ほぼ理想的な協力関係が形づくられている、と言える。

又、放送と並行して、札幌をはじめとする道内六都市で、ラジオ・テレビ共2回ずつ（札幌のみは3回）、計13回（両講座で26回）のスクーリングが各市教委の協力で実施され、放送後のフォロー、意見の反映等いろいろな意味でシステムとしても充実している。

#### 2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

本年度のテレビ講座は「文化としての北」、北海道の地方性を問う、というテーマであった。北の文化の特性を、自然環境、文化人類学、歴史、現代社会構造、比較文化などの立場から探り、今日的な北海道の地方性のあり様を考えようとしたもので、地域的、身近な問題であることを考慮して、次のような工夫を行った。

- ・講師の人間性をどのように表現するか。

講師の専門的な知識ばかりではなく、ひとりひとりが北海道とどうかかわり、どう生きてきたかを、パーソナルな面を含めて構成するよう努めた。

- ・セットのあり方

講師の日常の生活空間（研究室）のセットを組み、そのデスク、壁面などをその講師の日常の品物で埋めた。資料や本、額の絵、書などがその講師の人柄を無言のうちに物語ってくれたようである。

・スクーリング会場での中継録画

最後の2回をスクーリング会場でのシンポジウムとした。会場の受講生、一人一人の顔が、そのまま北海道を語ってくれると思ったからである。

一方、ラジオのテーマは普遍的な「中国の古典を読む」であった。

「易」から「紅樓夢」まで、難解な13の古典を、さまざまな工夫（言葉のリズム、京劇の舞台音、作品の時代背景、中国文化の流れと日本文化とのかかわり、など）を通して音の世界に翻訳、表現することに努めた。

毎回、専任講師の解説の部分を受け、それが、講師の個性的な語り口と全体への統一感という両面から好評であった。

### 3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

テレビ講座に関しては、テーマが身近であるため、各地でのスクーリングでの反応もかなり真剣で、受講生一人一人の立場からの質疑が講師との間で熱心に交わされていった。又、今回の講座に対する各大学からの評価も高く、テープの借用による教育利用の申し入れが道内4大学から寄せられている。モニター報告、番組審議会でも好評であったが、総体的なテーマの展開を基に、各回が組み込まれていたため、一回だけ見たのでは分かりづらかった、という意見もあった。ラジオ講座に関しては、当初、メディア的にかかなりの不安を感じていたが、意外に「分かり易く面白かった。」という反響が多く、むしろ「漢字」の世界が私たちにとっていかに身近なものかを逆に教えられる結果となった。

視聴率、聴取率に関しては、別紙の通り。

ただ、テレビに関して言えば、スクーリング受講生の60%以上が、テープ視聴というデータであった。

### 4. 実施上の問題点と今後の課題等について

今回、ラジオは毎週日曜日、20時～20時45分、テレビは毎週日曜日、23時40分～24時25分の放送時間であった。

ただし、テレビの場合、日曜日であるために、スペシャル編成、日本シリーズ等の影響を受け、24時10分～25時55分、25時10分～25時55分という深夜に放送がずれ込む結果が起こっている。

放送時間の確保が問題点として考えられる。

又、ビデオ視聴を将来的に志向するとすれば、その方向も、著作権の問題等を含め検討する必要があるだろう。

## 北海道大学

いずれにしても、大学、局共に多忙なスタッフで、今後とも質的に高い番組作りを志向するためには、もう少し予算面での裏打ちが望まれる。

### (2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 文化としての北 ―北海道の「地方性」を問う―

制作担当者： 北海道放送報道制作局テレビ制作部 安 藤 千鶴子

「文化としての北」を担当されることになった講師の先生方とスタッフが、初めて顔を合わせた会議の様子が、今も印象深い。

13回をどのように展開させて行くか、討議がつづくうち、先生方のお話の中心になったのは、ご自身と北海道のかかわりについてであった。

「ぼくが北大に来たのは、30年前の3月。雪がチラつくドロコ道。正門の前に角帽姿の学生がたむろしていて、その足元を見てオドロイタ。みんなゴムの長靴をはいているんです。角帽と長靴。これは大変な所に来てしまったと……。」

北海道の風土特性を担当される自然地理学の藤木先生。

「ところが住んでみるとだんだんファンになるんです。ぼくはもう墓まで買いまして……。」

歴史的にみた北海道をご担当の近代日本史、永井先生。

「北海道は北だといわれますけど、もっと北に住む人々にとって北海道は、南なんですね。アラスカなどでは氷が常態なわけですから」と、人類学的に見た北海道を担当される岡田先生。

「わたしはドサン子。奥尻島の海辺で大きくなりました。同じ北海道でも、私の育った海岸部と、内陸部では気質も言葉もまるで違うんですね。」と現代社会構造の中の北海道をご担当の笹森先生。

「ぼくは隅田川のはとりに育って戦後、北海道へ。どうも東京がく根にあるようだし、北海道にもなじんでいるようだ。そこで今回のテーマは、自分自身の根源を探す知的な旅でもあるのです。」と主任講師を勤められる、言語文化部の本田先生。

先生方のお話を伺いながら制作担当者も考えていた。

明治のはじめ、北海道に渡ったという私の先祖は、どんな想いで、津軽海峡を越えてきたのだろうと……。

自然科学、文化人類学、歴史、現代社会構造論、比較文化論など、様々な切り口を通して「文化としての北」を制作してゆく中で、この北海道に生きている自分自身の位置を確かめてみたいと願ったことであった。

それが、この講座を受講して下さるひとりひとりの思いとも重なって行ければと……。

猛吹雪の一月下旬の収録を皮切りに、北海道各地はもとより、青森、東京、奈良県十津川村まで取材は及んだ。いずれの場合も、先生方のご努力と熱意に、むしろ制作スタッフがひきずられるような具合であった。

最後に12・13回はスクーリングの会場、北大学術交流会館でのシンポジウムであった。

終了後、受講生の中年の紳士に声をかけられた。「文化が育つためには産業の活性化が是非とも必要と思いますが……。」「実は……」と担当者は答えた。「大学は次回のテーマを、“北海道の産業構造”にしようと考えているようです。」「待ちどおしいですね。お正月はビデオにとったく文化としての北を、まとめてゆっくり観るつもりです。」

その方はそう言って、雪の中を去って行った。

(ラジオ科目) 中国の古典を読む

制作担当者： 北海道放送ラジオ局制作部副部長 白 野 弘 子

「北海道大学—ラジオ講座」のねらいは、「易」から「紅樓夢」まで、漢字、思想、歴史、文学など各分野の代表的な13種の古典を時代順に配列し、それらの作品を通して、18世紀までの中国文化の諸相としてその流れを通観しようというものであった。

早々に他の大学（北海道教育大学札幌・旭川分校、北海道学園大学）を含めた大学側講師と局側スタッフが基本構想について話し合い、講師陣の的確な判断の下で「中心テーマ」と「構成」が整った。一方、放送の実際についての打合わせ会やスタジオ見学を事前に行い、収録開始後の作業は順調に進んだ。

制作者にとっての基本的な課題は、受講生や聴取者が、この難解な13種の古典に、期待通りの興味を持つことが出来るか……。メディアの制約を乗り越えて如何に分り易く伝えられるか……。

その対応策として、

- ・各回の担当講師の出演前後に、専任講師を配置した。専任講師は、北海道大学文学部教授の松川健二氏、北海道大学文学部助教授の丸尾常喜氏の二人で分担し、それぞれ漢字文化、思想、歴史、文学と得意な分野で、テーマの導入とまとめ役を果たすコーディネーターを務めた。
- ・講座は、よく知られている作品、それに論語や漢詩の耳なれた言葉などの話を糸口として、中国文化の流れや、作品そのものの鑑賞、また、日本文化との歴史的関わりを覗かせながら構成した。中国の音楽（中国の人気曲「遊子吟」など）や中国語による作品朗読（「唐詩選」）や講師自訳文（「列女伝」、「儒林外史」、「水滸伝」、「紅樓夢」）のタレントやアナウンサーによる朗読、また、京劇の舞台中継音（「水滸伝」の芝居「林冲夜奔る」から、林冲が梁山泊へ向かう途中、家族のことを思って唱う部分）などを入れて工夫した。
- ・テキストの無い人には、メディアとしての限界もあり、分り易いよう努めたが、内容的には難解だった。とりわけ、漢字や漢語の説明には気を使った。

総合的に見て、専任講師（コーディネーター）の配置、13人の講師の個性溢れる易しい語り口や独自の視点が、中国文化への関心と理解を深めるきっかけになったと確信する。

「漢字の意味って、意外に面白いですね」、「女子と小人の意味がああと知りませんでした」、「朝に道を聞けば……の考え方がとても興味深かった」、「少し難しいと思っていたが、終わっ

北海道大学

てみると中国文化の深さに感銘を覚えました。隣国の文化について、もう少し知りたくなった」という声も聞かれた。

制作担当者としては、もう少し多くの人に聞いて欲しかった。

## スクーリング担当講師及び参加状況表

( テレビ講座 )

地区	回	実施日	講 師	講 演 テ ー マ	参加人数
札幌	第1回	62.11.16	元理学部教授 藤 木 忠 美	北・ここにはじまる	85
	第2回	62.12.14	言語文化部教授 本 田 錦一郎 文学部教授 永 井 秀 夫 文学部教授 岡 田 宏 明 旭川医科大学教授 笹 森 秀 雄	シンポジウム	89
	第3回	63. 1. 8	永 井 秀 夫	北海道の歴史と風土	63
旭川	第1回	62.10.29	本 田 錦一郎	北海道の文化とヨーロッパの文化	23
	第2回	63. 1.12	笹 森 秀 雄	北の夜話 ― 北海道とところどころ	18
函館	第1回	62.11.11	文学部教授 八木橋 貢	地方性と国際化	18
	第2回	63. 1. 8	藤 木 忠 美	内地の香り	12
帯広	第1回	62.11.27	笹 森 秀 雄	北の夜話 ― 北海道とところどころ	21
	第2回	63. 1.11	永 井 秀 夫	北海道の歴史と風土	19
留萌	第1回	62.11.11	岡 田 宏 明	北の人と文化	17
	第2回	63. 1.13	八木橋 貢	地方性と都市化	13
北見	第1回	62.11.11	本 田 錦一郎	北海道の文化とヨーロッパの文化	16
	第2回	63. 1.13	岡 田 宏 明	北の人と文化	17

北海道大学

(ラジオ講座)

地区	回	実施日	講 師	講 演 テ ー マ	参加人数
札幌	第1回	62.11.10	文学部教授 松 川 健 二	「仁」の諸相—論語のことばから—	122
	第2回	62.12.15	言語文化部教授 中 野 美代子	『三国志』と『三国志演義』—歴史と小説	106
	第3回	63. 1.12	文学部助教授 丸 尾 常 喜	科举と中国文化	104
旭川	第1回	62.11. 5	北海道教育大学旭川分校教授 宮 本 勝	古代中国の後宮	25
			北海学園大学教養部助教授 城 谷 武 男	長江・長沙・沈從文	
	第2回	63. 1.14	丸 尾 常 喜	科举と中国文化	20
函館	第1回	62.11.20	宮 本 勝	古代中国の後宮	30
			文学部教授 大 島 正 二	中国の字書と文化	
	第2回	63. 1.13	文学部教授 菊 池 英 夫	中国の歴史書—紀伝体と編年体—	17
帯広	第1回	62.11.30	言語文化部教授 藤 本 幸 三	古典と現代—魯迅・毛沢東の場合	27
			松 川 健 二	仁者の愛憎—論語の言葉を中心に—	
	第2回	63. 1.14	文学部助教授 須 藤 洋 一	科举と中国文化	23
留萌	第1回	62.11.18	教養部非常勤講師 室 谷 邦 行	自然と人間—莊子から荀子へ	24
			藤 本 幸 三	古典と現代—魯迅・毛沢東の場合	
	第2回	63. 1.20	中 野 美代子	『三国志』と『三国志演義』—歴史と小説	24
北見	第1回	62.11.17	言語文化部助教授 野 澤 俊 敬	唐詩と西域	21
			丸 尾 常 喜	科举と中国文化	
	第2回	63. 1.19	松 川 健 二	「仁」の諸相—論語のことがから—	18

昭和62年度 北海道大学放送利用の大学  
公開講座視聴率及び聴取率等

(テレビ科目) 文化としての北 (放送期間 62.10.4～12.27)

今回(62年度) 平均 1.9% (38,570世帯)  
テレビ世帯視聴率 前回(61年度) 平均 1.9% (34,500世帯)  
前々回(60年度) 平均 1.9% (38,600世帯)

テレビ世帯視聴率(62.10.4～12.27)

区 分	JNN ニュースデスク (前番組)	北海道大学 放送講座 (23:40～0:25)	淀川長治の 映画の部屋 (後番組)
第1回 (10/4)	3.8%	1.9% ※1	1.8%
第2回 (10/11)	2.7	1.8	1.1
第3回 (10/18)	4.3	1.8	1.5
第4回 (10/25)	2.7	0.7	2.0
第5回 (11/1)	1.3 ※2	0.9 ※3	1.0
第6回 (11/8)	4.5	3.4	3.3
第7回 (11/15)	3.8	2.1	0.2
第8回 (11/22)	5.7	3.4	2.0
第9回 (11/29)	4.8	3.5	1.7
第10回 (12/6)	3.4	1.1	0.4 ※4
第11回 (12/13)	3.6	1.2	0.8 ※4
第12回 (12/20)	5.1	1.8	1.9
第13回 (12/27)	3.2	1.1	2.3 ※5
～13回平均～	3.8%	1.9%	1.5%

(テレビ視聴率：1%＝20,300世帯)

※1放送時間 24:10～24:55

※2前番組 日米女子ゴルフ

※3放送時間 24:10～25:55

※4後番組 高校進学テレビ講座

※5後番組 マドンナINジャパン

北海道大学

(ラジオ科目) 中国の古典を読む (放送期間 62.10.18～63.1.10)

今 回(62年度) 0.1% (エリア内聴取人口 5,000)  
ラジオ聴取率 前 回(61年度) 0.3% (エリア内聴取人口 15,000)  
前々回(60年度) 0.1% (エリア内聴取人口 5,000)

ラジオ聴取率 調査日: 62年11月29日(日)

区 分		H B C 子 供 音楽コンクール (前番組)	北 海 道 大 学 放 送 講 座 (20:00～20:45)	麗美のポップ ステーション (後番組)
全 体		0.4	0.1	0.4
男 性		0.3	※	※
女 性		0.4	0.2	0.8
男 性	12～19歳	※	※	※
	20～24歳	1.8	※	※
	25～34歳	※	※	※
	35～44歳	0.7	※	※
	45～59歳	※	※	※
女 性	12～19歳	1.1	1.1	2.2
	20～24歳	※	※	1.9
	25～34歳	※	※	※
	35～44歳	※	※	※
	45～59歳	0.8	0.1	0.6
職 業 別	給 料 事 務	※	※	※
	給 料 労 務	0.6	※	※
	商 工 自 営	0.9	※	※
	女 子 有 職	0.5	0.1	1.0
	学 生 ・ 生 徒	0.5	0.5	1.0
	家 庭 婦 人	※	※	※
	ド ラ イ バ ー	0.4	※	0.5

エリア内人口6,589,000人・ラジオ好適人口(12～69歳)5,093,000人

## 講座の概要

## 〈科目の概要〉

科 目 名	中心的なテーマ	科 目 の ね ら い	内 容 ・ 方 法
文化としての北 —北海道の「地方性」を問う— (テレビ)	北海道にもし独自の地方性というものが存在しうるなら、それはどのような特質をもつか、あるいは、本州とのかかわりで、独自の「文化」形成に必要なほどよい時間を欠いているために、日本的な意味での「地方性」と異なった資質を示しているとするなら、今後それをどのように見直すべきか。これからの北海道の文化の在り方を、過去と現在を照合させながら、じっくりと考えていく。	ヨーロッパの文化にはそれなりの「統一性」がありながら、細部ではフランス、ドイツ、イギリス、イタリア……と「多様な文化を育成している。  では、日本の極北に位置する北海道が、その厳しい風土の中で、原住民としてのアイヌの生活様式や、本州からの多種多様な人々の担ってきた文化、それにロシア・欧米のバタ臭い文明さえかえこみ、(既述のヨーロッパの意味での)「統一性」をもった日本文化の中で、どのような「多様性」としての「地方性」を構築してきたか、ないしは構築しつつあるか、これを再点検する。  そして、在来、風土論一辺倒に近かったものに、自然科学的、人類学的なメスを入れ、さらに精細な歴史的考察と、近代化の極限に到達しようとしている現代社会の急激に変化した構造と、その中で北海道の意味をさぐり、かつての北海道論や文化論・文学論の視座の拡大、深化、場合によっては変更をうながす基盤を提供できればと願っている。	第1回では、本科目のねらいと全体の構想が序説的に解説される。第2回と第3回で、北海道の「北辺性」たるゆえんを、地理、地質、気象、植物その他、自然科学的観点から分析する。第4回と第5回においては、人類学的にこれを解明し、第1段階の学習(ごく大まかな意味での横軸としての風土論)を終了する。第6回から第7回・第8回に至る講義では、文化の縦軸としての歴史を、明治以前と以後に焦点をしばって細部にわたり解きほぐし、これで第二段階の学習を終わり、第9回目からは、現代の社会構造の中での北海道が論じられる。まず、北海道の植民における文化の多様性の統一化、いわば平等化の必要性などが政治的な画一化と呼応し、例えば、冠婚葬祭などの合理化現象として説明されよう。第10回は、ヨーロッパの例に即しながら、近代化の終局にくる文明の画一的文化の風化現象の危機が主張される。第11回目では、これらを大まかに要約し、文化の意味を再び問い、今後の北海道の方向性を、「統一」

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
			と「多様性」の文化理論を基礎として究明する予定である。最後の12・13回は、シンポジウムの形態をとって、残されたテーマ、あるいは問題点を自由討議する新しい方法を試みる。
中国の古典を読む (ラジオ)	中国の古典作品を通して中国文化の特質を理解する。	歴史的に漢字文化圏に属し文字をはじめとして広く深く中国の思想・文化・制度を受け入れてきたわが国の文化の特質に眼を向け、あわせてわが国と異質な中国文化の諸特徴やそれが人類の文化にたいしてもつ普遍的な意味について考える。	13種の古典作品を各回1種ずつ13人の講師が担当し、作品の成立過程や歴史的背景、その概要や歴史的な位置づけを説明し、作品の読解・鑑賞を行う。作品は時代順に配列し、全体として前近代中国文化の諸相とその流れを通観できるよう配慮する。

〈各科目の構成〉

(テレビ科目) 文化としての北海道―北海道の「地方性」を問う―

主任講師：言語文化部 教授 本 田 錦一郎

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月4日	序 説 ―本講座の方法と目的と概要―	言語文化部教授 本 田 錦一郎
第2回	10月11日	北海道の風土特性Ⅰ ―北海道のイメージ―	元北海道大学理学部教授 藤 木 忠 美
第3回	10月18日	北海道の風土特性Ⅱ ―日本および世界の中の 北海道の位置―	〃
第4回	10月25日	人類学的に見た北海道Ⅰ ―文化のクロスロード・ 北海道―	文学部教授 岡 田 宏 明
第5回	11月1日	人類学的に見た北海道Ⅱ ―環北太平洋圏と北海道―	〃
第6回	11月8日	歴史的に見た北海道Ⅰ ―近世の蝦夷地と北方問題―	文学部教授 永 井 秀 夫
第7回	11月15日	歴史的に見た北海道Ⅱ ―北海道の開拓と日本の 近代化―	〃
第8回	11月22日	歴史的に見た北海道Ⅲ ―北海道を拓いた人々―	〃
第9回	11月29日	現代社会構造の中の北海道	旭川医科大学教授 笹 森 秀 雄
第10回	12月6日	近代化の光と闇	文学部教授 八木橋 貢
第11回	12月13日	結 び ―問題の整理と文化における 統一と多様性について―	言語文化部教授 本 田 錦一郎
第12回	12月20日	シンポジウムⅠ	言語文化部教授 本 田 錦一郎 文学部教授 永 井 秀 夫 〃 教授 岡 田 宏 明 旭川医科大学教授 笹 森 秀 雄
第13回	12月27日	シンポジウムⅡ	〃

(ラジオ科目) 中国の古典を読む

主任講師：文学部 教授 松川 健二

” 助教授 丸尾 常喜

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月18日	『易』 —中国的思维の源流—	文学部助教授 伊藤 倫厚
第2回	10月25日	『莊子』 —否定の哲学—	教養部非常勤講師 室谷 邦行
第3回	11月1日	『史記』 —歴史と人間—	言語文化部教授 藤本 幸三
第4回	11月8日	『列女伝』 —儒教社会の女性—	北海道教育大学旭川分校教授 宮本 勝
第5回	11月15日	『説文解字』 —漢字の世界—	文学部教授 大島 正二
第6回	11月22日	『文選』 —貴族たちの詞華—	北海道教育大学札幌分校助教授 後藤 秋正
第7回	11月29日	『唐詩選』 —知識人の文学—	言語文化部助教授 野澤 俊敬
第8回	12月6日	『資治通鑑』 —歴史の精神—	文学部教授 菊池 英夫
第9回	12月13日	『論語集註』 —新儒学の成立—	文学部教授 松川 健二
第10回	12月20日	『水滸伝』 —市井の文学—	北海学園大学教養部助教授 城谷 武男
第11回	12月27日	『西遊記』 —その魅力と謎—	言語文化部教授 中野 美代子
第12回	1月3日	『儒林外史』 —庶民と官僚—	文学部助教授 須藤 洋一
第13回	1月10日	『紅樓夢』 —近代への苦悩—	文学部助教授 丸尾 常喜

〈スクーリング〉

(テレビ科目) 文化としての北 ―北海道の「地方性」を問う―

地区名	会 場	第 1 回	第 2 回	第 3 回
		実 施 日 時	実 施 日 時	実 施 日 時
札幌	北海道大学 (学術交流会館)	昭和62年11月6日(金) 18:30～20:30	昭和62年12月14日(月) 18:30～21:30	昭和63年1月8日(金) 18:30～20:30
旭川	旭川市中央公民館	昭和62年10月29日(木) 18:30～21:00	昭和63年1月12日(火) 18:30～21:00	
函館	函館市民会館	昭和62年11月11日(水) 18:30～21:00	昭和63年1月8日(金) 18:30～21:00	
帯広	帯広市民会館	昭和62年11月27日(金) 18:30～21:00	昭和63年1月11日(月) 18:30～21:00	
留萌	留萌市中央公民館	昭和62年11月11日(水) 18:30～21:00	昭和63年1月13日(水) 18:30～21:00	
北見	北見市民会館	昭和62年11月11日(水) 18:30～21:00	昭和63年1月13日(水) 18:30～21:00	

※ テレビ講座の札幌地区第2回目スクーリングは、放送(第12回、第13回)のシンポジウムを兼ねる。

北海道大学

(参 考) スクリーニング担当講師及び講演テーマ

地区名	回	実施日	講 師	講 演 テ ー マ
札幌	第1回	62.11. 6	元 理 学 部 教 授 藤 木 忠 美	北・ここにはじまる
	第2回	62.12.14	言 語 文 化 部 教 授 本 田 錦 一 郎 文 学 部 教 授 永 井 秀 夫 文 学 部 教 授 岡 田 宏 明 旭川医科大学教授 笹森 秀雄	シンポジウム
	第3回	63. 1. 8	永 井 秀 夫	北海道の歴史と風土
旭 川	第1回	62.10.29	本 田 錦 一 郎	北海道の文化とヨーロッパの文化
	第2回	63. 1.12	笹 森 秀 雄	北の夜話―北海道とところどころ
函 館	第1回	62.11.11	文学部教授 八木橋 貢	地方性と国際化
	第2回	63. 1. 8	藤 木 忠 美	内地の香り
帯 広	第1回	62.11.27	笹 森 秀 雄	北の夜話―北海道とところどころ
	第2回	63. 1.11	永 井 秀 夫	北海道の歴史と風土
留 萌	第1回	62.11.11	岡 田 宏 明	北の人と文化
	第2回	63. 1.13	八木橋 貢	地方性と都市化
北 見	第1回	62.11.11	本 田 錦 一 郎	北海道の文化とヨーロッパの文化
	第2回	63. 1.13	岡 田 宏 明	北の人と文化

## (ラジオ科目) 中国の古典を読む

地区名	会 場	第 1 回	第 2 回	第 3 回
		実 施 日 時	実 施 日 時	実 施 日 時
札幌	北海道大学 (学術交流会館)	昭和62年11月10日火 18:30～20:30	昭和62年12月15日火 18:30～20:30	昭和63年1月12日火 18:30～20:30
旭川	旭川市中央公民館	昭和62年11月5日木 18:30～21:00	昭和63年1月14日木 18:30～21:00	
函館	函館市民会館	昭和62年11月20日金 18:30～21:00	昭和63年1月13日水 18:30～21:00	
帯広	帯広市民会館	昭和62年11月30日月 18:30～21:00	昭和63年1月14日木 18:30～21:00	
留萌	留萌市中央公民館	昭和62年11月18日水 18:30～21:00	昭和63年1月20日水 18:30～21:00	
北見	北見市民会館	昭和62年11月17日火 18:30～21:00	昭和63年1月19日火 18:30～21:00	

北海道大学

(参 考) スクーリング担当講師及び講演テーマ

地区名	回	実施日	講 師	講 演 テ ー マ
札幌	第1回	62.11.10	文学部教授 松 川 健 二	『仁』の諸相 ―論語のことばから―
	第2回	62.12.15	言語文化部教授 中 野 美代子	『三国志』と『三国志演義』―歴史と小説
	第3回	63. 1.12	文学部助教授 丸 尾 常 喜	科挙と中国文化
旭 川	第1回	62.11. 5	北海道教育大学旭川分校教授 宮 本 勝	古代中国の後宮
			北海学園大学教養部助教授 城 谷 武 男	長江・長沙・沈從文
	第2回	63. 1.14	丸 尾 常 喜	科挙と中国文化
函 館	第1回	62.11.20	宮 本 勝	古代中国の後宮
			文学部教授 大 島 正 二	中国の字書と文化
	第2回	63. 1.13	文学部教授 菊 池 英 夫	中国の歴史書 ―紀伝体と編年体―
帯 広	第1回	62.11.30	言語文化部教授 藤 本 幸 三	古典と現代―魯迅・毛沢東の場合
			松 川 健 二	仁者の愛憎 ―論語の言葉を中心にして―
	第2回	63. 1.14	文学部助教授 須 藤 洋 一	科挙と中国文化
留 萌	第1回	62.11.18	教養部非常勤講師 室 谷 邦 行	自然と人間 ―莊子から荀子へ―
			藤 本 幸 三	古典と現代―魯迅・毛沢東の場合
	第2回	63. 1.20	中 野 美代子	『三国志』と『三国志演義』―歴史と小説
北 見	第1回	62.11.17	言語文化部助教授 野 澤 俊 敬	唐詩と西域
			丸 尾 常 喜	科挙と中国文化
	第2回	63. 1.19	松 川 健 二	『仁』の諸相 ―論語のことばから―

## 〈再 視 聴〉

地 区 名	会 場	再 視 聴 実 施 日 時	
		テ レ ビ 講 座	ラ ジ オ 講 座
札 幌	北海道大学 放送教育事務室	毎週水曜日（10月7日 ～1月6日） ・13:00～17:00 ・18:00～19:00	毎週月曜日（10月19 日～1月11日） ・13:00～17:00 ・18:00～19:00 但し、12月28日及び 1月4日の分は1月5日 に行う。また、月曜日が 祝日の場合は、その翌日 に行う。
旭 川	旭 川 市 中 央 公 民 館	実施日及び時間について は市教育委員会から受講 生に通知	実施日及び時間について は市教育委員会から受講 生に通知
函 館	函館市亀田福祉センター	〃	〃
帯 広	帯 広 市 民 会 館	〃	〃
留 萌	留 萌 市 中 央 公 民 館	毎週月～金曜日 ・9:00～16:00	毎週月～金曜日 ・9:00～16:00
北 見	北 見 市 民 会 館	毎週土曜日 ・13:00～20:00	毎週土曜日 ・13:00～20:00

※ 年末年始（12月29日～1月3日）は除く。

## ○ 研究会（学習会）

札幌地区を除く各学習指導地区では、スクーリングのほかに市教育委員会が主催する研究会（学習会）が開催された。

研究会（学習会）では、チューター（学習指導員）が講演及び学習の指導助言を行った。

## 研究会（学習会）学習指導員及び講演テーマ

（テレビ科目） 文化としての北 ―北海道の「地方性」を問う―

地区名	回	開催日	学習指導員（チューター）	研究会（学習会）テーマ
旭 川	第1回	62.11. 4	旭川竜谷高校 教 諭 福 岡 イト子	北の歴史と風土 ～ひと・くら し・文化～ 江戸時代と北の島 「蝦夷地」 ～内地の人はどう 見ていたか～
	第2回	62.11.18	〃	〃 北のフロンティアⅠ ～開拓の歴史と移住～
	第3回	62.12. 2	〃	〃 北のフロンティアⅡ ～拓けゆく旭川～

北海道大学

地区名	回	開催日	学習指導員（チューター）	研究会（学習会）テーマ
函 館	第 1 回	62.10.20	北海道教育大学函館分校 教 授 奥 平 忠 志	特にテーマは決めておらず、研究会開催日まで放送された各回の内容について講師と受講生が対話、質疑応答を行っている。
	第 2 回	62.11.17	〃	
	第 3 回	62.12. 1	北海道教育大学函館分校 助教授 佐々木 馨	
	第 4 回	62.12.15	教 授 奥 平 忠 志	
帯 広	第 1 回	62.11.17	帯広市教育委員会社会教育課 主 任 酒 井 孝 幸	十勝の地方性を考えるⅠ
	第 2 回	62.12. 7	〃	〃 Ⅱ
留 萌	第 1 回	62.10.14	留萌市教育委員会社会教育課 主 事 福 士 廣 志	自 由 討 議
	第 2 回	62.12. 2	〃	北海道の中の留萌の歴史
北 見	第 1 回	62.10.26	北見工業大学 教 授 清 水 昭 典	近代北海道の特色
	第 2 回	62.12.15	〃	北海道人の社会的性格と近代性

(ラジオ科目) 近代ロシアの歴史と文学

地区名	回	開催日	学習指導員(チューター)	研究会(学習会)テーマ
旭川	第1回	62.10.28	北海道教育大学旭川分校 非常勤講師 小林孝虎	中国歴史のとびらを開く 秦の始皇帝Ⅰ ～統一への道を歩む～
	第2回	62.11. 4	〃	〃 秦の始皇帝Ⅱ ～長城と陵墓への道～
	第3回	62.11.11	〃	〃 拓けゆくシルクロード ～武帝の西進～
	第4回	62.11.18	〃	〃 玄奘三蔵が行く ～西遊記の背景～
	第5回	62.11.25	〃	〃 古代の遺跡を振りかえる ～古城・故城そして古墳群～
函館	第1回	62.10.27	北海道教育大学函館分校 教授 高木重俊	特にテーマ等は決めておらず、研究会開催日まで放送された各回の内容について講師と受講生が対話、質疑応答を行っている。
	第2回	62.11.10	〃	
	第3回	62.12. 8	〃	
	第4回	62.12.22	〃	
帯広	第1回	62.11.24	帯広市民大学講座懇話委員 太田修教	中国の心を読むⅠ
	第2回	62.12.10	〃	〃 Ⅱ
留萌	第1回	62.10.28	留萌秋の俳句会事務局長 川西鉄雄	故事名言について
	第2回	62.12.16	〃	枕草子と詩賦について
北見	第1回	62.10.21	北海学園北見大学 教授 鈴木淳一	中国文学と日本文学Ⅰ
	第2回	62.12. 9	〃	〃 Ⅱ